(1) 教師の教育者としての自覚を高揚し身心ともに健全な児童生徒の育成を期する。
(2) 道徳教育の徹底をはかる。
(3) 学力水準の向上につとめる。
(4) 産業教育を振興して産業要員の県内確保につとめる。
(5) へき地教育、特殊教育を振興する。
(6) 健康生活を推進する。
(7) 教育環境を整備する。
(8) 私学の振興と高等教育機関の充実につとめる。

児童生徒の健全育成

道徳教育の振興

青少年に対する道徳教育の振興、徹底は、人つくりの根幹をなすものであってその対策として、①教職員の研修の強化②道徳指導書の作成、郷土読本の編集など指導資料を整備するとともに、③各校にカウンセラーの増員をはかり、青少年補導体制を強化する。

健康生活の推進

本県児童生徒の形態面の発育は、表6のとおり急速に伸びているが、全国に比べるとまだ相当のひらきが見られる。また、運動能力は全国平均よりよいが、形態面の伸びに比べて体力の低下が目立っている。

ところで、体位の向上に学校給食のもたらす効果は大きいが、その普及状況は表7のとおり、完全給食の全面実施にはなお程遠いものがある。

このため、①学校給食の普及をはかるとともに、②栄養管理、学校給食衛生管理、健康管理などに関する指導者養成の強化、③養護教諭の完全配置と学校医の増員を行なう。④なお、県給食会事務所の建設も給食事務遂行上必要である。

<表4> 中学卒業者の高校志願状況

(単位：千人)

年次	中学卒業者数 (A)	志願者数 (B)	高校入学者数 総数 (C)	公立	私立	志願率 (%)	入学率 C/B(%)	進学率 C/A(%)
昭37	42.7	22.3	21.0	14.4	6.6	52.2	94.3	49.2
38	50.7	28.5	27.3	18.5	8.8	56.1	96.1	53.9
39	51.1	30.2	29.0	19.4	9.6	59.0	96.1	56.7

<表5> 産業教育設備の現況

区分	新基準に対する現有率 (%)
全課程平均	20.1
農業	11.8
工業	26.4
商業	19.8
水産	10.7
家庭	21.2

学力水準の向上

本県における児童、生徒の学力の実態は、次第に向上の実績を示してきているが、なお全国平均をかなり下回っている。学力に影響を及ぼす要素は複雑であって、例えば地域類型によっても、市街地と農山漁村の間には相当の差が見られる。

以上のような学力水準の差は、学校の施設、設備、学校規模、一学級の生徒数教師の指導力職員組織、大きくは県民所得の水準など諸要素の総合されたものと考えられるので、対策としても総合的な施策が必要である。そのため①施設、設備の充実、②教職員の研修の強化、③教育研究団体の育成強化など教職員の資質を高め、③また、学校訪問指導を強化して教育環境の総合的な向上をはかる。⑤なお本県には、いまだ教職員の研修の場が設置されていないので、総合教育センターの建設が必要である。

横顔

生活の中の体育

—城南町豊田小学校—

昭和三九年、体育研究委嘱校に決まり、この二年間の指導は体育の生活化と、施設用具をフルに活用した業間の指導との、二本の柱にそって進められた。子供たちは、体育の正課時間よりもはるかに多い自分たちの生活時間をもっている。この時間の活動に方向を与え、子供たちの自らの手で体力の向上をはかるよう指導してやるとすれば、学習としての体育教育は、何十倍もの効果をあげ得るのだ。それと、豊田小独得のものに、第二時限と第三時限との間の二五分間、全校一斉に行なう業間体育がある。綿密にてたられた年間計画に従って、校内の施設用具があますところなく全校生徒によって使われる。

古タイヤを使った跳びこし台、超低鉄棒など、先生たちのアイディアもふんだんにある。業間体育は、全生徒による「しあわせなら手をたたこう」のリズム運動で終わる。各学年ごとに、思い思いの違ったリズム運動がひろげられる。アヒルになる一年生、とび上る三年生、逆立ちしている六年生のクラスもある。どちらかといえば苦手としたリズム運動に、興味を起こさせるのに成功したようだ。

二年間の成果は、あまりにもはっきり出た。かって、同じ城南町の各校に比べ、体位、運動能力ともに極めて劣っていた豊田小は、本年度の陸上競技記録会で、六年生一〇種目中八種目のタイトルを独占した。

<表6> 年令別男女別の形態

区分			6才(小学1年) 男	6才 女	9才(小学4年) 男	9才 女	12才(中学1年) 男	12才 女	15才(高校1年) 男	15才 女
形態	身長(cm)	熊本	111.6	110.9	127.0	126.5	142.0	144.5	161.9	153.3
		全国	112.6	111.6	128.0	127.4	143.4	145.4	162.8	153.9
	体重(kg)	熊本	19.0	18.5	25.6	25.4	34.6	37.3	51.7	48.3
		全国	19.3	18.8	26.0	25.7	35.6	37.8	52.0	48.3
	胸囲(cm)	熊本	56.7	55.1	62.4	60.7	68.8	70.4	80.7	79.1
		全国	56.6	55.0	62.4	60.8	69.2	70.8	80.6	79.1

注) 形態は38年度調査による

<表7> 学校給食の普及状況

区分	小学校 実施校	小学校 比率(%)	中学校 実施校	中学校 比率(%)	夜間定時制高校 実施校	夜間定時制高校 比率(%)
総数	564	92.0	214	84.9	2	13.3
完全給食	396	64.6	30	11.9	2	13.3
補食〃	2	0.3	1	0.4	—	—
ミルク牛乳〃	116	27.1	183	72.6	—	—

注) 昭39.4.1現在

教育環境の整備

小・中学校の整備充実

(1) 人的条件の改善

一学級の生徒の定員を適正にし、教職員の定数を確保することは、学習指導や生徒指導の効果を上げるための必要条件であり、国においても関係法の一部を改正し、三九年度から五カ年計画でその実現を期することとなった。

したがって、法に基づいて、①学級編成基準を緩和し、②教職員の増員とその確保をはかる。③また、教職員の健康管理の方策を講ずるとともに、④教職員の質の向上が必要である。

(2) 物的条件の整備拡充

本県における小・中学校の校舎、屋内体育館の現況は、かなりの不足坪数があり、また老朽校舎も多い。かつ鉄筋、鉄骨建は全体の一五%を占めるに過ぎない。そのうえ特別教室の不足が目立っており、なお、プールに至っては設置率が小学校一九・四%、中学校一五・三%と低い。

したがって①危険校舎の改築、②不足坪数の解消、③特別教室の

<表8> 理科教育の現有状況

(単位: 百万円)

区分	基準金額	現有額	現有率(%)
小学校	302	122	40.4
中学校	321	112	48.4

注) 昭83.4.1 現在

横顔

父親の試食会も

—熊本市城東小学校の給食活動—

昭和三七年、給食の研究委嘱校になった当時の課題は、残食の解決であった。給食を食べ残す子供があまりにも多いのである。まず、児童の食生活態度の実態が調査された。都心に位置した小学校。児童はほとんどが商店の子である。両親と食事を共にする機会が極めて少ない。不規則なおやつの習慣。嗜好の片寄りなどが明らかとなった。「高栄養」と喜んで食べる「おいしい給食」をめざして、給食内容はもちろん、野菜の刻み方まで検討された。同時に、児童の食事に対する理解を深める努力が、全校あげて行なわれた。各教室にとりつけられた特製の黒板には、給食内容とからだをつくるために、どう役立つかが、分りやすく示されている。子供たちは、納得の上、給食に積極的になっていった。さらに、各家庭の関心を高めるため、父親試食会も開かれた。

四年間の成果は、ミルクを残すもの零。おかずを残すものも殆んどない。

全校生徒の体位をグラフでみると、平均をやや下廻っている低学年が、グングン伸びて、高学年に至って平均をかなり上廻っているのが分る。全洗面所に備えられた石鹸液による手洗い。給食後一斉歯みがき。本年度給食優良校としての文部大臣表彰の栄誉はこういった一貫した保健教育に輝いたのである。